説教ワンポイント

生きる！

ヨハネ四・四六～五六

サマリアからガリラヤ入りしたイエスのもとに「王の役人」がやってきました。「息子が病気で死にかけています。カファルナウムまで下ってきて、どうか助けてください」。いつもならすぐ向かうイエスが、なぜかつれない答え。「あなたがたはしるしや不思議な業をみなければ決して信じない」。「役人」も必死で「主よ、死ないうちに…」。なのに、一向に動かないイエス。

決して、いじわるしているのではありません。ただ「役人」の目的とイエスの目的が違ったのです。「役人」は自分の息子の病気が治るかどうかが問題でした。そのため自分がもつ権力をも傘に無理にでもイエスを連れていこうとする。しかしイエスにとっては、どうしたら信じることできるかが問題でした。もちろん息子がどうなってもよいのではありません。むしろこう言われる。

「帰りなさい、あなたの息子は生きる！」

突然の宣言に誰もがびっくりしたでしょう。でも「その人は信じた」。ここで主語が変化していることに注意。イエスの言葉を信じると、世でもつ力も地位もふり払われて、みなただの「人」になるのです。信じた「この人」が家路につくと、留守番の家来がやってきて、「昨日の午後一時、息子さんの病気が良くなりました」。それがちょうどイエスが「生きる」と言われた時刻であることを「父親は知った」。ここでさらに主語が変わり、初めて「父親」と呼ばれる。

愛する息子の命であっても、自分でどうすることも出来ない。しかし、自分の力も思いも及ばぬところで注がれる、大きな愛が確かにある。主の言葉を信じ、その深い愛にゆだねきることを知ったとき、人ははじめて「父親」になる。

（二〇一六年六月二六日礼拝より、津田記す）